

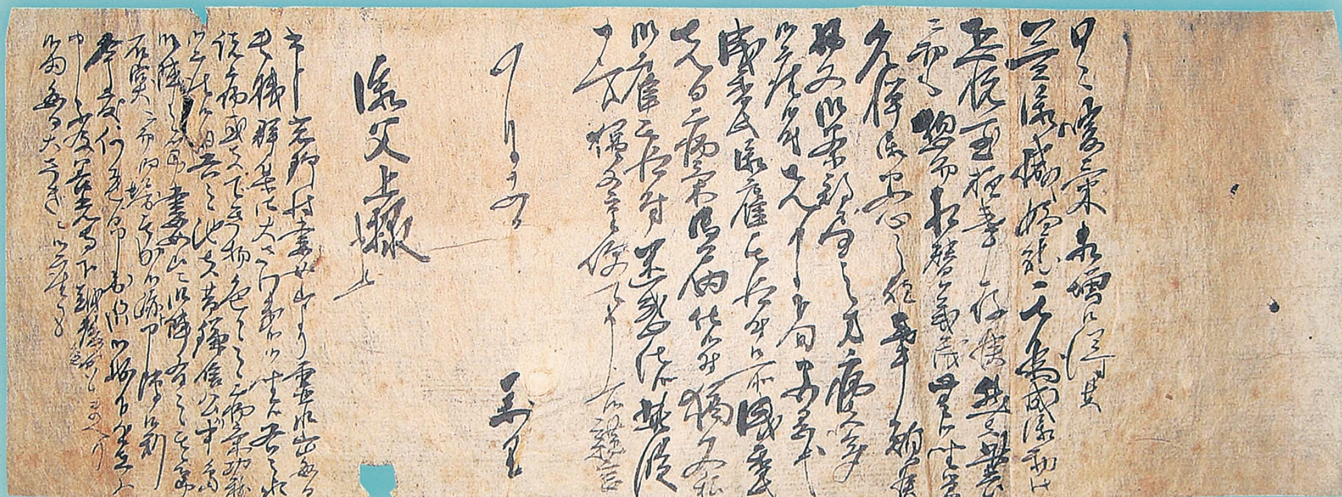
六^あ連^ん銭^{せん}

平成18年12月

〒381-1231 長野市松代町松代4-1(真田宝物館)

“川中島古戦場”の誕生

— 毎日大きはぎに御座候 —



月岡万里書状 (父にあてた手紙)

— 解説は4頁 —

川中島の戦い関連遺跡調査

松代文化財ボランティアの取り組み

松代やその周辺の文化財調査を進める松代文化財ボランティアの会では、川中島の戦いに関連する遺跡等の調査を進めています。同会の有志によって、更級郡地域を担当するグループ、埴科郡地域を担当するグループ、それに水内、高井郡を担当するグループの三グループにわかれて、各地域の史跡に足を運び、そこにある石碑や案内看板等を調査するというものです。

川中島の戦いの遺跡は、当初から遺跡として

認識されたものだけでなく、後世に何らかの意図のもとにつくられたものもあります。

今回はその調査の中でも、村上義清に関する史跡についての調査結果の概要をお知らせします。

筈の渡

時は戦国・室町末期。村上義清は幾年にわたって武田信玄と激しい戦いを繰り返していましたが、天文二十二年（一五五三）四月、ついに居城の葛尾城が陥落し、敗走中の混戦の中、奥方に別れ別れに城を後にしたのでした。義清夫人は数人の腰元を従えて着のまのま暗い山道を下つていきます。

千曲川辺に来た義清の奥方たちはこの川を渡って村上の支城である上山田の菩提城へ逃れようとして、船と船頭を探して助けを請うたところ、船頭は快く引き受けて無事に向かう筈の舟石へくぐることが出来ましたが、奥方は我が身の危険をかえりみず舟を出してくれた船頭を心打たれ、お礼として髪にさしていた筈を手渡しました。

村人たちは義清夫人を憐れんでこの渡しを「筈の渡し」と呼ぶようになったといわれています。

中部北陸自然歩道

埴科郡 長野県

筈の渡

川中島古戦場調査つぼれ話①

「村上義清夫人の伝承」

更級郡担当グループは、六月四日に、坂城・上山田方面を調査しました。その中で、天文十六年（一五四七）の葛尾城落城のうちに村上義清の夫人が城から落ち延びたことに関連して、文献に興味深い伝承が見つかりましたのでいくつか紹介します。

比丘尼岩

①「村上義清公が葛尾城を自落して、越後へ逃れたとき、奥方は姫城を脱出して、自分の身の危険を感じ、苧屋原の方へあわただしく駆け降りて非難し、私はこれでよいが、その代わりどうか郷里の住民の皆さんが永遠に幸せであるようにと、祈願してここで化石になったといわれている。」

②「一旦逃れ出た奥方が、城に還って自刃しようとして引きかえし、岩崎にいたって、城の焼けるのを見て驚き、立ったまま比丘尼岩となった。」

筈（こうがい）の渡

「村上義清の内室は後妻にて高梨の息女なり。時に葛尾に火の懸りければ、内室はひそかに山を抜け出で歩行裸足にて苧や原の方へ下り、千

曲川の渡を越し給うに舟長俵を乞う、せんかたなくて金の筈を渡し通られし故にこの渡を筈の渡という」と云へり」

姫の祠

「天文二十二年（天文十六年）村上義清、武田信玄の亡す所となり居城焼失せり。義清の夫人逃れて千曲川の瀬に至り、自ら筈をとりて舟子に与へ川を渡る。武田氏の軍兵追え来りて囲む。夫人終に通るべからざるを知りて自刃す。後に夫人の霊を祭り祠を建立す。詣てるもの多し。」

*現在、「姫の宮址碑」が残されており、石祠は近くにある自在神社の本殿に移したという記述がありました。地元の方にお聞きして、自在神社本殿まで六〇〇段の石段を上りましたが確認できませんでした。残念。

御局屋敷

「旧新山村の地字名「御局」の一角に「御局屋敷」の名所があり、その端に山の神と呼ぶ石祠があった。ここは岩井堂山烽火台の西南中腹の緩傾斜の広い屋敷地で、村上義清の奥方が逃れて一時の隠住地とされた所と俚俗は伝説している」

*今回の調査では確認できませんでした。

女涙坂（おなみざか）

「上山田村字水上より女沢川を越して牧の内

へ登る坂を女涙坂という。女涙坂は古来山城への登城口の坂道をいう。「牧の内」には中世牧場の守役の城館があった。その館への登坂で急坂でもあったようだ。俚俗は義清の奥局が侍女と逃げ来りて白手拭を被っていたため追手に射られ没したところと伝説する。その奥方の亡き遺骸は女沢川北岸に埋めた。それを御台塚という。又藤枝塚とも云うと。」

*現在、女沢に「女涙坂橋」がありました。御台塚は確認できませんでした。

伝承は、夫人の亡くなった場所・経緯、逃げ延びて隠居した場所などいろいろでした。伝承ですから、どれがどうということではなく、ただ坂城の人たちの夫人に対する思いが感じられました。これからも、伝承として伝えられている「思い」を見つけたいと思います。(森多毅夫)



川中島古戦場調査ごぼれ話②

六月五日、埴科郡班では、千曲市、埴科郡班城町方面の調査に参加しました。

宇佐美橋

千曲川に沿って土口村に至る古道(間道)があり、それに平行して生仁川が流れている。その古道と土口方面へ行く道に架けられた橋。永禄年間(一五五八〜七〇)の合戦において、宇佐美駿河守が架けたという。

雨宮の渡

昔の千曲川は、この付近を流れていたという。北国往還の川中島原村から直線南行した所に、この渡し場があったという。永禄四年(一五六一)、上杉謙信は妻女山の陣から南に下り、この道から千曲川を渡って、武田勢へ迫ったという。頼山陽の詩「鞭声粛々夜川を渡る……」の石碑をはじめ、いくつかの碑がたち、案内看板も整備されている。

耕雲寺

武田信玄・勝頼親子の信仰が篤く、寺号は信玄自身によるものといわれている。長い杉並木の参道が続く。

満泉寺

村上家代々の菩提寺は修善寺という。町の東山ろくの御所沢にあった。義清が越後に逃れ、その後に義清の子、村上景国が天正十一年(一五八三)に松代城に入ると、その居館跡に満泉寺を建立して菩提寺とした。

葛尾城

村上義清が居城した。上田原の戦いに敗北した義清は、居城に帰還しようとしたが城が失火によって失われたという。義清はそのまま越後へ逃れる。

灯の松

義清夫人が僅かな腰元を従い姫城から脱出。苅屋原の方へ避難しようとして夜道をたいたまつ灯りをたよりに葛山の急坂を下る。途中のたいまつを松の木に結びつけ、その灯りで千曲川におりたといわれる。

(佐野民男)



絛盞じょあんの襖下貼りの書簡から

永川 強

妻女山に靈水湧く！この騒ぎの様子は月岡万里から江戸詰中の父、久栄嘉孝に差出した手紙の追而書（追伸）に記されたものです。

月岡家は茶道を以て松代藩真田氏に仕えた家系で、士分格でありました。月岡家で万里を名乗るのは二代嘉通と四代嘉知がおり、この手紙の差出人は書癖と文中の同役名からみて、四代の万里嘉知と思われまます。

この書簡は月岡家住宅（絛盞）の襖の下貼りに、多量に使われていた反古文書のうちの一枚で、その大半は手紙類でありました。襖などの下貼りに書籍や反古文書を使用しているのは武士住宅だけのものではなく、農家や商家でも多く見受けられますが、その内容と質の高さは武士住宅のものが群を抜いています。

ここに紹介する月岡万里の父宛の手紙は、形式どおりに主文を述べ、追伸として奥に松代近郊の湧水事件を知らせています。手紙の通例として月日のみであり、年号は記されていませんが、父の久栄は天保五年（一八三四）に勤番中の江戸で客死しています。したがって文化七年（一八一〇）生れの四代万里からして、この靈水風説は文政末から天保初年の頃と推定することができます。また、この書体からみて差出した手紙の下書きとも考えられます。

書面はつぎのように読むことができます。

日々暖氣相増候得共

益御機嫌能被為成御勤仕

恐悦至極奉存候然者此表

二而も惣而相替義茂無御座候間

乍憚御安心之程奉願候

扱又御茶部屋之方病者多

御座候付先月下旬宮岡氏

浅香氏御雇被仰付候所浅香氏

先日病氣御届仕候付猶又私

御雇被仰付迷惑仕候此段

申上候猶又重便可申上候謹言

四月十四日 万里

御父上様

申上

尚々岩野村妻女山より靈水出毎日

貴賤群集御大さハ口御座候右之水

諸病或はでき物色々之病氣効能

御座候由右之池は昔謙信公川中島

御陣之節妻女山二御陣有之其節

石突二而御掘被成候跡ト申伝ハ利

今度何れより申出候哉御城下近在ハ

申不及善光寺下越後よりもまへり

候由毎日大さハぎ二御座候以上

（夕テ十四・九cm ヨコ四十・八cm）

主文はほぼ真名文字で書かれ、松代の氣候や日々の生活のことを知らせ、花の丸御殿の「御茶部屋」における同役茶坊主に病人が多く出て、自分も迷惑を被っている状況を報告しています。

さて、今回の主題は追而書に記されている妻女山靈水湧出の事件についての考察です。

今から約一八〇年前頃の狂騒は何者かによって仕掛けられた虚説が、城下はもちろん、善光寺方面から遠く越後からもその靈水を求めて群衆が押し寄せたありさまを簡潔冷静に記しています。

このような風説はいつの時代にもあることで、近代に入ってから枚挙に暇がない。この文中にもあるように「……今度何れより申出候哉……」とあるように、まだ若い万里は静かにこの騒ぎを観察している。

わが国の戦史上で名高い川中島の戦いから約二七〇年もの後に、このような珍説が作り出され、上杉軍の槍の石突（尻手に付く鉄製具）で掘った穴というところが面白さを演出している。

この靈水の湧水池跡は現在でも妻女山北面の中腹に現存し、過ぎし日にそのような騒ぎが無かったがごとく、藪の中に沈んでいる。

（番匠代表）

